

西洋中世学会第 14 回大会 (2022 年) ポスター報告要

旨

1 長澤 咲耶 NAGASAWA Sakuya (東京大学人文社会系研究科)

カロリング期フランク王国の説教テキストと聖書注釈の比較—研究領域の融合性の提示—

Comparing Homily and Biblical Commentary in Carolingian Era

—Presentation of Coalescence Reserching Area—

カロリング期フランク王国において、説教テキストと聖書注釈は聖職者をはじめとする知識人たちによって多く生産された。その中でも本報告ではフルダ修道院長を務め、その後マインツ大司教に就任したラバヌス・マウルス (c780-856) が国王に依頼されて執筆した説教集と聖書注釈、また依頼時の国王とラバヌスのやり取りの痕を残す書簡を取り扱う。これらから浮かび上がる説教テキストと聖書注釈の呼称問題、両史料の類似性を論じ、両史料類型の研究領域の融合可能性を論じる。

2 桑原 夏子 KUWABARA Natsuko (早稲田大学高等研究所)

洞窟聖所研究事始—マテーラ近郊「原罪のクリプタ」を例に

The Beginning of Cave Sanctuary Studies: The Case of the "Crypt of Original Sin" in

Matera, Italy

山間部に洞窟や石窟を穿ち、聖所を設ける例は洋の東西を問わず広く見られる。特殊な環境が選択された理由を探ること、同所を飾る装飾の特徴を明らかにすること、聖地として文化が形成された経緯を探ること、こうした研究関心をもとにイタリア、トルコ、中国、日本を中心に他の研究者たちと比較研究を開始した。

本発表ではその一つの事例として、イタリア、マテーラ近郊の「原罪のクリプタ」を取り上げる。8-9世紀の作とされる壁画装飾に注目し、様式分析や図像分析を通して、どのような文化的要素が流入しているのかを探る。

3 安藤 さやか ANDO Sayaka (東京藝術大学 専門研究員)

オットー朝期コルヴァイの彩飾写本に於ける装飾イニシアルと充填文様

Decorated Initials and Ornamented Grounds of the Ottonian Illuminated Manuscripts

from Corvey

822年に創建されたコルヴァイ修道院では、10世紀初頭以降、福音書や典礼書に線描挿絵や装飾イニシアルが施されるようになり、同修道院スクリプトリウムはオットー朝期の豪華彩飾写本制作の拠点のひとつとなる。コルヴァイの写本は、9世紀中葉の北仏で支配的であったフランコ＝サクソン派の様式を受け継いだ、幾何学文・動物文によるモニュメンタルな装飾イニシアルを特徴とする。本報告では、金銀の装飾イニシアルと余白の充填文様との関係に着目し、コルヴァイ写本の手本に対する様式的独自性とその源泉を明らかにする。

4 近藤 真彫 KONDO Mahori (宝塚大学)

初期シトー会写本装飾における靈的「闘い」の表象

Images of Spiritual 'Battle' in Early Cistercian Illuminations

1098年創立のシトー修道院から伝わる最古の写本群は、第3代修道院長スティーヴン・ハーディングが取り組んだシトー会の靈的かつ組織的な基盤形成の一環として1110年前後に制作された。本報告では、そのなかでもロマネスク写本芸術の白眉とされる『ヨブ記註解』の挿絵装飾に注目して、独自の図像形成と装飾プログラムについて考察する。特に、繰り返される「闘い」のモチーフについて、靈的成長を促す伝統的な象徴性だけでなく、同時代の修道院改革と十字軍運動との関連を考える。

5 北館 佳史 KITADATE Yoshifumi (中央大学)

サヴィニーの聖人崇敬と修道院のアイデンティティ

The Cult of Saints and Monastic Identity at Savigny Abbey

隠修士で説教師の聖ヴィタルが1112年に創建したサヴィニー修道院は急速に発展して改革派の修道院の連合を形成した。1147年にシトー会に吸収されたが、サヴィニーのグループは修道会の中で一定の自律性を保持したことで知られている。サヴィニーの共同体は聖ヴィタルをはじめとした一群の聖人たちを輩出し、伝記や奇跡集を作成し、崇敬を組織化した。本報告では聖人伝や歴史叙述からサヴィニーの共同体のアイデンティティについて考察したい。

6 井上 果歩 INOUE Kaho (サウサンプトン大学博士研究員／東京藝術大学専門研究員)

Postdoctoral Research Fellow, University of Southampton / Tokyo University of the Arts

モンペリエ写本：アルス・アンティクァの計量記譜法の変遷を読み解く

The Montpellier Codex: Changes in Mensural Notation during the Ars Antiqua

モンペリエ写本(F-MOfH 196)は、アルス・アンティクァ期(1160~1330年頃)に成立した現存最大級のモテット集であり、初期の計量記譜法で書かれた数少ない楽譜資料の一つである。この写本は8つのファシクル(以下F)からなるが、本発表ではF2~6が1270~1280年頃の、F1・F7が1280~90年頃の、F8が1300年頃の計量記譜法で書かれていることに注目し、モンペリエ写本の製作の過程で計量記譜法がどのように変遷していったのかを検討する。

7 有田 豊 ARITA Yutaka (立命館大学・政策科学部)

詩編にみる中世ヴァルド派の教理—写本の分析と翻訳—

Medieval Waldensian Doctrines in their Poems: Analysis and Translation of Manuscripts

12世紀に創設されたキリスト教の一派であるヴァルド派は、中世期においていかなる教理を有していたのか。この問題について先行研究では、カトリック教会文書を根拠史料として彼らの教理が明らかにされる傾向があり、中世ヴァルド派側で作成された各種文書は、殆ど分析対象とされてこなかった。本研究は、現存する中世ヴァルド派文書のうち、彼らの教理が記されているという「詩編」を分析し、詩を通して表出される中世ヴァルド派の思想や精神世界の解明を目指すものである。

8 坂田奈々絵 SAKATA Nanae (清泉女子大学 Seisen University)

中世における教会建築解釈：マンドのドゥランドゥス『聖務の理論』を中心に

Interpretations on Church Architectures in the Middle Ages:

Focusing on Guillaume Durand's *Rationale divinarum officiorum*

13 世紀に書かれたマンドのドゥランドゥスによる典礼注解書『聖務の理論 *Rationale divinarum officiorum*』には、ミサや典礼暦の解説だけでなく、教会建築全体や、その各部に対する解釈が様々に書かれている。本発表ではこの『聖務の理論』を軸に、先行する典礼注解書や、影響関係の指摘される諸文書に書かれた建築解釈を対照させつつ、西方中世において教会建築がどのように解釈されていたのかについて考える。

9 高木麻紀子 TAKAGI Makiko (東京藝術大学)

中世末期のタピスリーにおける現実と幻想——ソミュール城の《野人の舞踏会》

The Real and the Imaginary in Late Medieval Tapestries: *Le Bal des Sauvages* at the Château de Saumur

フランス、ソミュール城寄託のタピスリー《野人の舞踏会》(ca. 1460-70) は、規模と質の両面で中世末期の世俗タピスリーを代表する優品であるが、長い間ソミュールの教会に秘匿されていた故か、未だ美術史からの本格的な研究は存在しない。異彩を放つその図像が幾人かの研究者の関心を惹いてきたものの、2020 年刊行のソミュールのタピスリー・コレクションのカタログでも主題解釈に関する明言は避けられた。本報告では、2019 年に行った実見調査を基盤とし、最終的に図像上の特徴と意味を解明するための足掛かりとして、まずはフランス語圏側からの考察を試みる。

10 加藤 政夫 KATO Masao (学習院高等科)

高等学校の世界史における西洋中世史—その可能性と限界—：事例⑩「演繹か帰納か？」

European Medieval History in High School History Education:

Whether to Take a Deductive or Inductive Approach

発表者は、昨年のポスター発表において、中世と近世が混同されやすいのは、歴史教育において時代区分を自明のものとし過ぎているからではないかという問題提起を行った。今回は、歴史教育において「中世」という時代を取り扱う際、生徒は「中世」という時代の定義を示されたうえで「中世に起きた出来事」に接するのがよいのか、「中世に起きた出来事」に接したうえで「中世」という時代の定義を示されたほうがよいのか、という問題を取り上げる。